

豆腐屋の跡

佐々木 勢津子 福島

試飲せる「樹氷のしずく」に惚れこみて二本買ひけり財布はたきて  
洒落た名の「月とお日さま」のカフェが建つ昔かよひし豆腐屋の跡  
リノベーションで何だよ日本語で言へよテレビに怒る米寿の夫は  
浅野屋の肉なしラーメン五十円「旨かったなあ」夫が言ひ出づ  
わが胸をほうと灯せる月あかり今宵はカーテン鎖さず眠らむ

手は痛からむ

大野 真智子 茨城

クッションの効く新しき靴履きてハクレン跳ねる川べりをゆく  
この夏を共に越えたる思ひせり帰らざりける白鳥一羽  
畑隅の鶏頭あかし火のやうな母の言の葉いまも灯れり  
弾丸のやうなる球を受けとめる手は痛からむセッターの手  
命よりまさるは何ぞ太陽の塔に向きあひ慰霊碑は立つ

母の独唱

金子 智佐代 茨城

車椅子の母の独唱われは見詰む学芸会のわが子のやうに  
「インドネシアのあの子がいちばん親切」と母はヒジャブのスタッフを指す  
「障子張り、二人ですると楽だな」と笑む夫の空あかとんぼゆく  
秋だから泣いてもいいぞゆふぐれの波のまにまに亡き父のこゑ  
ゆふぐれの空のひかりのイリュージョン果てなむ空の白き眉月

地下鉄

宮内博子 埼玉

地下鉄に土のほひのまじり出し地上の雨をすみやかに知る  
雨の日の有楽町線傘先のしろがねいろにかすか目眩す  
とろとろと東京メトロにとろむ昼とほき地上にテロリズムあり  
地下鉄のホームでわれを追ひ越した靴底赤き勝気なパンプス  
乗り慣れぬ都心の電車におろおろと母の右手をさがしたくなる

祈り

尾崎潤子 千葉

発祥はベルシャともいふ青海波のでぬぐひで拭く朝のてのひら  
とほき日に夫のくれたイスラエルみやげは十字架のネックレス  
ガザにまた戦火があがるぢりぢりと夏の余熱をひきずる十月  
戦闘のそらどこまでも交はらぬイスラムの祈りユダヤの祈り  
戦場がまたひとつ増えかなしみは増えゆく指数関数的に

ユメザメ

近藤哲夫 神奈川

瞬膜をもたぬユメザメ相模湾にしばし目を閉ちあさき夢みる  
暁の夢に出でてきてパトラッシュそつと告げたりアロアのその後  
つぎの世は金管奏者 たぶのきの森の奥より秋は来にけり  
すだ椎の森はふくよかほらあそこちびまる子ちゃんちいと祖父さまがゆく  
神保町路地奥へ満留賀のもり、二枚たちまち腹にきえたわかき日

右目左目

三浦陽子 長野

鳴りやまぬ風鈴の音のつめたさよ西向く部屋の窓閉めにゆく  
幾たびの夏なぐさめし風鈴か九月の夕べ短冊の落つ  
向きあへばむきあふ人の左目はわたしにとつて右側にある  
自撮りした顔をスマホで送つたよ右にあるのが右目だからね  
たくさんの栗の実柿の実背負はせて帰してやりたい熊出没す

いつから秋に

杉本なお 静岡

すれちがふ足音のなかに聞こえ来つ誰かがうたふWe Will Rock You  
外灯のあかりの外はみな暗く道だと思ふところを歩む  
ひかへめに点すのが良しものけをうつかり照らしてしまはぬやうに  
先輩はひとりで狩りへ出かけたなりアプリのなかに武器を構へて  
あの赤いところはみんな彼岸花いつから秋になつたらう

明日に延ばさう

才野 洋 京都

砂山の影が砂場の外へ伸ぶ子らが夕餉に帰りたる園  
晩秋の朝の空気の緊張をストーブの火がほぐしゆくなり  
今日できることを明日に延ばさうと決めて仰ぎぬ筋雲の空  
気の合はぬ人との電話なりしかど十分以上話してをりぬ  
今はもう歌会に見えぬ人なれど案内を出せば礼状の来る

朝のひかり

小野 はつね

兵庫

ききやう柄の透かしうちはで風をやる友の連れ来し犬のゴン太へ  
幼子の指が捕へしオニヤンマ「はなせ」と太き尾くの字に曲げる  
棕の樹の下に置かれし子供椅子朝のひかりをまだらにのせる  
部活帰りの少年たちも招き入れにぎはふ町内作品展は  
収穫せし人の手おもふスパーであかむらさきの葡萄選りつつ

棋譜

鮎川 清

山口

痛恨の落手を指ししその直後髪かきむしる永瀬王座は  
主催紙の日経を見つつ並べをり藤井八冠達成の棋譜  
独り住む家に戻れば白百合のはつか揺れたり風なき真昼  
エアコンのせゐで聞くこと稀なりし風鈴しまふ彼岸中日  
三年まへ妻の育てし紫蘇の裔いまだに残る庭のをちこち

濃鼠の鯉

立石 千代女

長崎

ペゴニアの葉を食みをれど見逃さうおんぶバツタは愛らしいから  
お彼岸に間に合はざりし彼岸花猛暑のせゐかまだまだつぼみ  
猛暑去りハエが元気に飛びまはる九月うる蠅いと書きたくなるほどに  
五日間空港そばに駐めてゐたクルマに言はるおかへりなさい  
池の面にたまご産みみる糸とんぼ濃鼠の鯉のつそりと来る